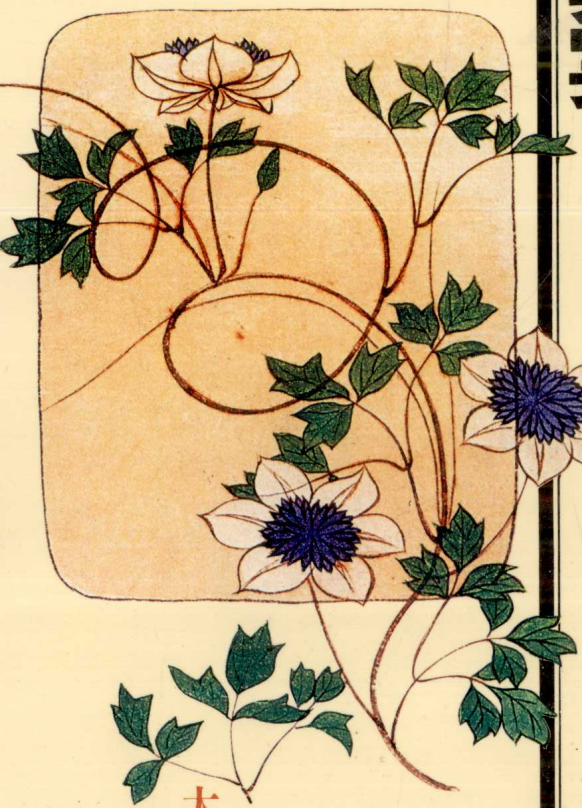
二者ともに相手への深い理解と尊仰をもって、「詩的なるもの」の核(コテ)としてある句の、個性と普遍、現代と古典、ことばと「思想」――すなわち詩(句)のもっとも本質的、かつ、今日的なテーマが究められていく。いま頂点にある二俳人を得てなった、比類のない俳句への案内。

森澄雄―角川春樹

詩の真実

俳句実作作法

白をもて
一つ年とる
浮鷗……澄雄



睡(ねむ)りても
大音響の
桜かな……春樹

角川選書―180

角川選書 180

詩の真実
―俳句実作作法

昭和六十二年九月二十日　初版発行

著者―森澄雄
角川春樹

©Sumio Mori
Haruki Kadokawa 1987

Printed in Japan

発行者―角川春樹　発行所―株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三　郵便番号一〇二　振替東京三―一九五二〇八
電話　営業〇三―三二三八―八五二一　編集〇三―三二三八―八四五一

装幀者―杉浦康平　協力―赤崎正一

印刷所―旭印刷株式会社　外装印刷―旭印刷株式会社

製本所―株式会社宮田製本所

定価はカバーに明記してあります

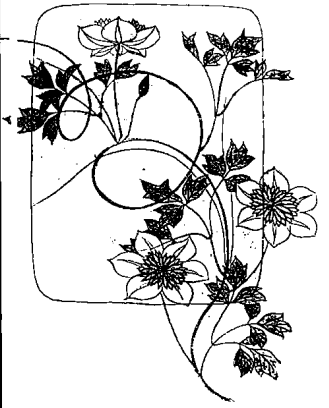
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

ISBN4-04-703180-1　C0395

森澄雄＋角川春樹

詩の真実

俳句実作作法



角川選書 180

詩の真実

—俳句実作作法—

森澄雄＋角川春樹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

*

目次

闇の向こうも現実 —— 七

いのちまたけき　意志と情熱　含羞（がんしゅう）と品位（くらい）　俳句の言霊　個性を超える個性　言語空間のひびき　闇を感ずる心　芭蕉を超える

詩の真実（1） —— 九五

淡海の景情　死後の眺め「山べのさくら」　西行と通いあうもの　無頼と

自在と男魂　直取引の句作り　俳句は人生観の表現　平凡なところから見えてくるもの　俳句を豊かにするために　君子は器ならず　遊行こそが俳句の思想

詩の真実（2）

地名の句、忌日の句　季語の不思議　俳句に向かう姿勢　没蹤跡（もつしようせき）と遊行と哺乳壜（ほにゆうびん）の連想から　無様がいのちの句　中道にして究極なるもの　「一言理屈はこれなく候」

俳句の虚と実 ―――――――――――――一九

地名の句と音楽性と　句集『花行脚』
の自在さ　虚にいて実をおこなう
寂光院の句など　蓬萊をめぐって
俗と風雅と　浮世の味わい　器量を
超えること

闇の向こうも現実

昭和60年2月1日　東京都練馬区大泉学園町　森澄雄氏宅にて

いのちまたけき

森　チベット*はどうでしたか。

角川　楽しかったです。

森　（『補陀落の径』は）親父*さんより面白いと思って、一生懸命読みました（笑）。

角川　うれしいですね（笑）。ところで、森さん、随分お元気になられましたね。

森　いーや、暮れから今まであまりよくないの。

角川　昨日まで、なんか旅行なさったとか……。

森　いや、旅と言っても療養。リハビリをかねて高血圧と脳卒中の後遺症にいいという温泉に……。旅行できりゃ一番いいんだけどね。

チベット

ダライ・ラマが即位する聖地には、神秘山という霊山と聖なる湖が存在すると古老がいった。しかし、捜し求めた補陀落は、神秘のチベットにも無かったのだ。補陀落は、単なる場所ではない。観音と人間が一体となっていなければならない。しかしながら、ラマ僧の寺院は既に俗化し、物欲を満たすこの世の芥溜めでしかなかったのだ。補陀落は伝説のシャングリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

今や旅行ができんから、ほんとに俳句はどん底に落ちてしまってね、どうしようもないの。

しかし、あなたの句を見ていると、東奔西走でしょう。遠野は行ったことないけど、*天川はいいところですもんねえ。

角川　あ、行かれましたか。

森　ええ。そして山の頂、せまーいところでね、耕して山の頂に住んでいる人がおるしね、あのへんはもうほんとにいいよ。

角川　天川をご存じの人はほとんどいないんです。

森　いないですね。あそこは歌人の前*（登志夫）さんと会うつもりで行ったんだけども、いなくてね。それであのへんを歩いてきました。

角川　吉野に行かれているのは知っていたんですよ、実は。

森　うん、吉野は何回も行くの。そして天川とかああいうとこへ……。あそこは能面がいいよね。

角川　そうです。あそこでは何といっても阿古父尉が一番いい顔してますね。

ラのように、人間の想念の中にしか存在していなかった。補陀落は理想郷であるばかりでなく、生き方でなければならない。チベットの補陀落が幻と識った時、私は一刻も早く日本に帰ろうと思った。日本にこそ、裸形上人が感得した補陀落があった。（角川春樹第四句集『補陀落の径』あとがき　昭和59年10月27日刊　深夜叢書社）

親父さん

〈馬喰の父子が過ぎて秋しぐれ〉
〈補陀落といふまぼろしに酔芙蓉〉

春樹君の径は、父源義を超えて、源義が果せなかった西蔵拉薩にまで達した。そしてそこでは、浄土とまるでかけ隔った芬々たる俗臭と、濃厚なマトンの脂の匂いに、

森　いいですね。

天河といふ能の地に春逝かす

という、あなたの句にあるけども。癋見も面白かったな。そしてあのへんで耕している……。粟なんかも作っているからね、田圃におるお百姓さんが癋見の顔していたりね。懐かしいところですよ、あそこは。

角川　森さんが吉野へ行かれているというのは、何かで読んだんですよ。「鷹」の藤田湘子さんとの対談（昭和59年10月号）も読ませていただきましたが、あれは素晴らしい対談でしたね。

森　あれはステーション・ホテルで、病気してから字が書けんから、まあ口の話なら何とかできると思って、はじめて行って喋ったんですよ。

角川　いや、私はあれを拝見して、これはもう負けちゃったと……。

森　いやいや、あれはもう、病気の後遺症で少し口のほうに不自由が残っているのでね。

嫌悪さえ感じて帰って来ている。これは一つの挫折だろうか。そうではなく、これから先は独りの道であることを、それは示していよう。父源義の導きが終るところ、春樹の新しい道が始まる。それから先は、春樹自身の源流遡回の道である。（山本健吉『補陀落の径』跋）

天川

天川というのは自分にとっては天の川につながっているということがみえたんだね、自分の直感で。認識じゃなくて直感でみえたわけだ。あ、これは銀河系の天の川につながっているという、だから〈銀漢に五十鈴を奏で巫女袴〉という俳句をつくった。（中上健

角川　いやもう、あの対談にすべて出ているというふうに私は感じましたね。

森　あなたの『流され王』*の主題の日本武尊（やまとたけるのみこと）の話でね、ぼくは思い出すのは、中学校の二年だったかな、国語の時間にあれが出てきて教室で読まされたこと覚えている。「いのちのまたけむ人は」でしょう、「畳薦平群（たたみこもへぐり）の山の熊白樫（くまかし）が葉を髻華（うずぎ）に挿せその子」かな、あれを読んでて、ヤマトタケルの心が胸にきてジーンとした気持ちになった。こないだ不思議なことに、「天国にいちばん近い島」を

次・角川春樹対談集『俳句の時代』発言＝角川　角川書店）

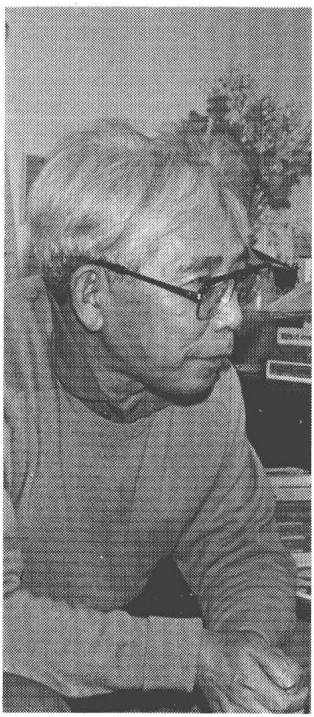
前登志夫（まえとしお）

〈夜となりて山なみくろく聳ゆなり家族（うから）の睡りかままゆの睡り〉

夜の闇の景色、雪の降る景色、さらにまた、山の魑魅（すだま）のうごめく景色が繰り拡げられる。それは前氏が日本人の魂のふるさとともいうべき吉野山上に生を享（う）けて、今日に到るまで山を下らず、周囲の山河とたえず言葉を交しつづけて来たからであろう。草木虫魚、地水火風といっても、言わば作者の家族（うから）であり、かつて太古にはそれらと言問い交わした懐かしい共存の生の方式を、氏は探ろうとする。

（山本健吉『短歌—その器を充た

観た。それで、あの青い海を見てね、それから戦争の話がちょっと出てくるでしょう、あそこでね、変な話だけど、涙が出て止まらん。周囲はみんな若い人ばっかりおるんだよね（笑）。ぼくもフィリピンからボルネオ*に行ったから、あの青い海が胸にきてね。涙がぽろぽろ止まらん。そうして映画が終わらない暗いうちに出てきた。なんで泣いているのか、と思われると恥ずかしいからね。ヤマトタケルの話も中学二年のときを思い出してね。立って読まされて、なんかしゅーんとしたことあるね。それが一昨年の九月、病気でたおれ



すもの』角川書店）

藤田湘子（ふじたしょうし）
大正一五年（一九二六）一月十一日―俳人。本良良久（よしひさ）。小田原市生まれ。昭和一八年水原秋櫻子に師事、二四年「馬酔木」同人、三二年より四二年まで同誌の編集を担当。三九年、俳誌「鷹」を創刊。豊かな感覚による私小説俳句を目指す清新な句風。句集『途上』（三〇年）、『雲の流域』（三七年）、『藤田湘子句集』（四七年）、『狩人』（五一年）、『春祭』（五七年）、『一個』（五九年）、『去年の花』（六一年）、評論集に『俳句全景』（四九年）、『水原秋櫻子』（石田波郷との共著。四八年）がある。〈月下の猫ひらりと明日は寒から

て、そのときね、ずうっと中学以来忘れていたあの歌を思い出してね、「いのちのまたけむ人」という……。そして、

鶏頭やいのちまたけきものを讃む

という句ができた。

角川　前書きは入っていなかったですね。

森　うん、うん。「いのちまたけき」というのは文法的には、どうかというところがあるんだけれどもね。その註釈をつけながら、自分が半身不随のようになっとったからね、健康な人を見ると、みんな大事にしなさいよ、という……。自分はもうこうなってしまって仕方がないけど。健康な人を見ると褒め称えたいような、そういう気持ちになりましてね。

意志と情熱

角川　私は森さんとの対談の話を承ったときに、よし、読んで自む〉（『日本文学史辞典』角川小辞典32）

『流され王』

津軽南部領旧伝本『吾妻昔物語』に〝流され王〟と申す御方の伝承のあるのを見出したのは、かの柳田国男翁であった。苦しい旅へ出たのは吉野のみかどと伝えられ、東北辺土の人々はみかどを〝流され王〟として久しく仰いだという。いわゆる貴人流寓の物語であった。すでに折口信夫は、尊い貴人がある罪を犯し、その罪をあがなうため一定期間流離しなければならなかった古代日本人の思考を〝貴種流離譚〟という美しい日本語に定着させていた。貴い貴人の神となるには、いちどこの世

分が気に入ったという句を全部、筆で書いてみようかと思ったんです。そうしましたら、特に好きだったのが七十七句あったんです。それを全部、部屋一面にずらーっと並べたんです（笑）。その中から更に、現代的なんですが、ベスト・テンを選んだんです、森澄雄ベスト・テンとして（笑）。更にベスト・テンから二十まで、二十から次点、次点と……。色紙が三百枚ぐらいなくなっちゃったんですよ。それがなくなったために清書をそこでやめちゃったんです。

森　いやいや、どうもどうも（笑）。

角川　なぜかといいますと、どういう気持ちで森さんが俳句を書いたんだろうかということを知りたかったんです。というのは、二年以上前になりますが湖北に行きましたら、「紅鮎荘」（湖北町尾上）に森さんの色紙があったんです。

森　ああ、そうか。あそこはよくかよったからな。

鳰人をしづかに湖の町

という「鳰」の句だったね、あそこのは。

を身罷って転生しなければならなかった。日本武尊——彼の人もまたそうであった。（角川春樹第三句集『流され王』序「流され王」由来　昭和58年10月27日　牧羊社）

ボルネオ

俳句をはじめてから五十年ちかくたつわけですけれども、自分の歩みを振り返ってみると、戦争というものが、やはりその後の生きかたの根本になっているし、俳句の上でも微妙なモメントになっていると思います。大学を出てすぐ出征して、昭和十九年の九月に北ボルネオのサンダカンに上陸するんですが、そこも空襲を受けて、タワオからブルネイあたりまで密

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook